

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	A県における父親の産後うつの実態に関する研究
作成者（著者）	中嶋, 秀明
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2023.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 6. p.119 119.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学部特別研究助成報告
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohohsj.6.119
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28215554">https://mylibrary.toho.u.ac.jp/webopac/TD28215554</a>

## A県における父親の産後うつの実態に関する研究

中嶋 秀明

## I. 緒言

父親の産後うつは2005年の報告<sup>1)</sup>をきっかけに調査研究が行われている。疫学データから、父親が産後うつであることが子どもの発達や家族のメンタルヘルスに影響を与えることを明らかにしたこの方法を用いて、数々の調査が世界的に行われている。2010年に行われた文献レビューにおいて、父親のうつの有病率は約10%であること等が指摘された。日本において父親の産後うつについての調査・研究は対象も調査内容も限定的である。今回A県での父親の産後うつの現状と要因についての検討を目的に調査を実施した。

## II. 研究方法

1. A県の「ワークライフバランスに取り組む企業907企業（2021年9月）に概要、研究対象者の数を聞く「企業票」と、研究対象の男性従業員に回答Webページへ案内する「研究依頼書」を送付した。

2. 企業の担当の方に企業票をWebで入力していただき、対象となる男性従業員に研究依頼書を渡してもらった。

3. 研究対象の男性従業員の方にWebページ（Google Forms）にアクセスしてもらい質問事項に回答していただいた。質問項目は以下6項目 1) 夫婦愛情尺度 2) 子供の数 3) 妻の抑うつに関する対象者の認識 4) 精神科通院歴 5) 職業状態 6) 経済的心配、目的変数はエジンバラ産後うつ病質問票（以後EPDSと略す）とした。

## III. 倫理的配慮

研究対象者に対し、回答をしないことによる不利益がないこと等をホームページに記載し、回答者の権利について周知した。倫理審査を受け実施した（東邦大習（部）3-55号）。

## IV. 結果

発送数907件の内、宛先不明で返却されたものが29件あった。送付実数878件中、回答企業は33社（3.8%）であった。回答は企業票のない対象者よりも得られ、合計30名より回答を得た。データに整合性のない1名を除いた29名の回答を対象とした。

EPDSでの産後うつのリスク高い対象者は5名（17.2%）であった。EPDSでのリスクによって対象者を2群に分けて、項目の内容を比較した。有意水準5%で統計上に差があるものはなかったが、対象者が配偶者をうつと考えている割合にのみに大きな差があった。リスクあり（40%）、なし（7.4%）。

## V. 考察

分析をするには単独の県ではサンプルサイズが小さいと推察された。

父親の産後うつには父親の認識の影響が考えられた。

本研究のデータを明治安田こころの健康財団成果報告書の一部として発表した。

本研究に利益相反はありません。

1) Ramchandani, P., Stein, A., Evans, J., O'Connor, T. G., & ALSPAC study team (2005). Paternal depression in the postnatal period and child development: a prospective population study. *Lancet* (London, England), 365(9478), 2201–2205. [https://doi.org/10.1016/S0140-6736\(05\)66778-5](https://doi.org/10.1016/S0140-6736(05)66778-5).